

南柯吟行句会IN唐招提寺・20251012

10点句

秋雨や障子明かりの百畳間 桃

特選 へちま・しょうん

並選 わこ・和草・富野香衣・太陽 花山・福田
洗弥

特選

重要文化財の中での句会を記憶に残す句
だと思ふ (へちま)

障子を開けると薄暗かった広間がパッと
明るくなった。障子の採光としての役割
を今日は実感したのだが、作者も同じ体験
の中で百畳間の広い空間の変化を拾いとっ
た。秋雨の中、ややグレーっぽい空間と百
畳間に感じた明るさの対比がよいと感じた。

(しょうん)

並選

秋雨により百畳の広間に光が滞り、入口
近くにいる人は奥の方が薄闇に…。秋雨に
よる悪戯を即座に切り取り、句になさいま
したね。

(富野香衣)

ありきたり感ありますが秋雨の感じもよ
く、良いワンシーンだと思います。(太陽)

7点句

山門を潜りてよりの秋思かな 町彦

特選 一止

並選 ひろし・わこ・しょうん・へちま・秋霜

並選

唐招提寺に限らず寺院仏閣の山門を潜る
と歴史や寺の由緒、鎮座する古仏などに関
心を寄せることになる。普段と違う空間に
身を置いて、何やら感じる心が心をよぎ
るだろう。そんな秋思の中に身を置いた作
者の感慨が伝わってくる。

(しょうん)

俳句を考えてのことか もっと重い課題
か想像が膨らむ (へちま)

6点句

まなじりに秋思纏ひて持国天 町彦

特選 桃・しょうん

並選 石黒・秋霜

特選

憤怒の形相を秋思を纏う詩の調べにした
ところが良かった (桃)

持国天とは国の平和を守り支える仏らし
い。その金堂の持国天のまなじりに焦点
が集まった。いささか国際社会や日本の安
全保障はきな臭い。そんな不安や憂いが持
国天のまなじりに秋思を見た。まなじりに
秋思を纏うという表現が合っているのかは
分からないが、調べがよいと思いました。

(しょうん)

並選

この寺の持国天はさすが国宝だけあって
風格が違いますね。憤怒の表情を秋思と捉
えたことだと思いますが、感じ方は人それ
ぞれあっていいと思います。

(石黒)

四天王の内、持国天の表情を捉えたのがい
い。納得できる。(秋霜)

雨天にも明るさありし花芙蓉 太陽

特選 わこ

並選 石黒・宮本こぼ・へちま・洋子

特選

曇り空の下の大きな白とピンクの芙蓉を見ました。確かにあそこだけは明るかったです。

(わこ)

並選

今日は雨天にも負けないくらい芙蓉の花が綺麗でしたよ

(石黒)

本当にそうだ

(宮本こぼ)

希望を見出すような秀句

(へちま)

5点句

木犀や碑に古(いにしえ)のものがたり
しょうん

特選 桃・二晁

並選 和草

特選

物語が石碑に書かれている。いにしえの物語の調べがいいですね。どんな物語なのかという想像も。

(桃)

途中に石碑があり銀木犀が咲いていました。とても良い写生句です。

(二晁)

天平の薨伝うて秋の雨

和草

並選 美也子・二晁・秋霜・太陽・桃
選外 へちま

並選

急に土砂降りの雨になりましたが、瓦屋根を天平の薨と表現されたのは凄いなあと感心しました。

(美也子)

萩の雨、綺麗です

(二晁)

下五の萩の雨でびしと決まった。天平の薨とよく響きあっている。

(秋霜)

天平の薨は作句において凄い武器ですねー。何を持ってきても仕上がる感、やっぱり良いです。

(太陽)

薨から萩へ という流れが良かった (桃)

選外

天平の薨が 少し 古い感じ (へちま)

吟行につかず離れず秋の蝶 富野香衣

並選 平華・ひろし・花山・へちま・太陽

並選

蝶は気楽な問ですね。

(花山)

吟行ならではの景色を的確に押さえた

(へちま)

最近、紋黄蝶がよく近くにいます。

人なつっこいのが可愛いです。 (太陽)

糸瓜かと問へば南京と答ふ人 石黒

並選 桃・宮本こぼ・へちま・太陽・孝

並選

へちまの形しているので、へちまだなどいってたら、横からおばさんがかぼちゃですと。切り取りがうまい俳諧味たっぷり (桃)

面白い (宮本こぼ)

へちま としては 少し悲しいが 愉快

(へちま)

このシーンは面白かったですね。

形はへちまで、皮と色合いはかぼちゃ。

吟行ですねー (太陽)

ハロウィンに使えるようなカボチャでは無いけど

新種との事 「答ふ人」が良いと思いました

(孝)

4点句

金堂に宇宙の真理蚯蚓鳴く 和草

並選 美也子・富野香衣・花山・二晁

並選

曼荼羅の事でしょうか。よく分からないですが何か壮大な句だと思いました。そこに蚯蚓鳴くの季語を持ってこられたのが面白く対比が上手いですね。

(美也子)

宇宙の真理ってなんだろう…と無学の私は考えてしまいます。それが季語の「蚯蚓鳴く」なんです。

(富野香衣)

蚯蚓も泣き出しますわ、聞いたこと無いけどなあ

(花山)

発想が良い

(二晃)

秋時雨^{しび}鴟尾は右向き左向き へちま

特選 富野香衣

並選 和草・秋霜

特選

当たり前の光景をいかに詩情をもって表現するかが俳句の妙。突然の雨で鴟尾も戸惑ってはいますが、そこは鴟尾らしくいつものポジションに…。

リズムのある句に仕上がっています。

(富野香衣)

吞さんも愛でし御陵や露時雨

富野香衣

特選 宮本こぼ

並選 平華・町彦

選外 孝

特選

本当に仕事場近くなので、あの辺り良く歩いておられた、鷺の吞といわれてました。

(宮本こぼ)

並選

吞さんを偲びつつ風景が浮かんできました。

(平華)

吞さんが愛でていたとは知りませんでした。

(町彦)

選外

今日もふらっとお散歩してるみたいでした。

(孝)

群れ咲くもポツンと咲くも曼珠沙華

秋霜

並選 二晃・孝・一止・洋子

並選

良く観察されています。

(二晃)

畦道や池周りにずらっと咲くのも美しく
また 今日見た一塊のも美しい ポツン

という言葉の選択が良いと思いました(孝)

秋時雨^{とひ}樋無き寺の雨重し 宮本こぼ

並選 平華・和草・福田洗弥・町彦

並選

樋が普及していない奈良時代を感じさせます。

(平華)

重量鑑真が見事。

(町彦)

双^{ふた}つ古寺むすぶ土塀や秋深し 一止

特選 平華

並選 富野香衣・しょうん

特選

何度も修復を重ねながら千年の歴史を今に伝える古寺と土塀、シンプルな中にそれらのエッセンスが表現されているように思いました。

(平華)

並選

唐招提寺と薬師寺の距離、位置を「土塀」に託したところが秀逸です。

(富野香衣)

唐招提寺と薬師寺の間には白壁土塀が続く。落ち着いた雰囲気の中に秋を感じ取った作者がいる。秋は白色だという、白壁の

小道を吹く風と一緒に歩いている作者の気分が感じられる。
(しょうん)

光背の千の化仏や秋深む 美也子

並選 桃・へちま・洋子・町彦

並選

千手観音という文字が多い 千の化仏
という収まりがいい。観音さんではない
その背後を読んでいるのも目が行き届いた感じがした。

秋が深む もいいのでは (桃)

化仏を数える事に秋が深まってゆくような
気持ちにさせる (へちま)

化仏と深秋との相性が良い。 (町彦)

わが肩に髪抜け落ちる秋の古寺 平華

特選 太陽

並選 石黒・町彦

特選

ちょっと見たことない句で、目線よくて秋の古寺とも合っている。秋思も漂う旅の句。奥行きがあってとても良いです。 (太陽)

並選

人生も秋になると髪も抜けてきますので、秋の寺に来てそのことを感じたのでしょうか。

(石黒)

具体的な身体表現と秋の古寺のミスマッチが見事。 (町彦)

花薄荷葉草園の効能書 わこ

特選 美也子

並選 和草・洋子

選外 へちま

特選

季語の花薄荷が良いですね。色々な葉草がありますがハーブでもあり葉草でもあり季語が効いています。 (美也子)

選外

面白い所を押さえています (へちま)

瞑目は秋思鑑真和上像 町彦

特選 和草・洋子

特選

鑑真さんは目は見えなくなっただけでも心の目で世間を世界を見て物思いに耽って

いると言う感じが秋思という季語にいきいていると思います。 (洋子)

御朱印の筆の奔りて秋日和 富野香衣

特選 しょうん

並選 平華・町彦

特選

筆の奔りがすらすらと筆先の流れていく様を表現して気持ちがいい句、秋日和の季語と合っていると思います。 (しょうん)

並選

明るいい秋日和の中、弾んだ気持ちが良く出ている。 (町彦)

3点句

盲^{めし}ゐたる和上の海の銀河かな 一止

特選 花山

並選 わこ

特選

鑑真和上を宇宙まで飛ばしてしまう創造力に感服しました。 (花山)

秋の雨寺の垂直軸数ふ わこ

特選 福田洗弥
並選 町彦

特選

垂木をぼんやり眺めている様子、寺の形を数学的に表現している様子と秋の雨が心地良い一句です。
(福田洗弥)

並選

垂直軸の言葉が新鮮。
(町彦)

農道をぞろぞろ行きて秋の茄子

美也子

特選 孝

並選 ひろし

特選

まさに吟行句 秋茄子もたわわに実り私達も 地域の人 観光の人 ゾロゾロでした
(孝)

校倉あぜくらに風を通して初紅葉 へちま

特選 町彦

並選 富野香衣

特選

校倉に風が通る光景と初紅葉がピッタリ。
(町彦)

並選

校倉造りの本意が「風を通して」に表れています。

「初紅葉」の「初」により、校倉造りの建物との新旧の対比が見えます。

その二つを繋ぐのが「風」に…。

(富野香衣)

自己主張人より多い案山子かな

ひろし

並選 富野香衣・しょうん・二晁

並選

案山子を詠んだ句の中で「自己主張」に着眼した作者の視点が素晴らしいと思います。ありきたりな格好では案山子本来の役割を果たせませんものね。
(富野香衣)

案山子は奇抜な姿もあれば普段着の農夫の姿、はたまたアニメのキャラなど多彩。それを自己主張と表現した。よくアニメキャラなど扮する人々がいつもの自分ではない自分を主張するが、案山子もそんな人々と同じだという目線が面白い。
(しょうん)

ミyakミyakもアンパンマンもしっかり自己主張していました
(二晁)

招提寺午後ひと雨の秋催い 太陽

特選 桃
並選 孝

特選

雨上がり秋がこの寺に秋が一段と進む秋の兆しがある と言葉のまとまりがいい
(桃)

並選

土砂降りに近い雨が降り アーと思ったら 上がる 午後ひと雨 良いですね (孝)

2点句

山霧や火照りを冷ます旅浴衣

福田洗弥

並選 ひろし・花山

並選

旅は楽しいものですねえ
(花山)

金堂の闇に有りしか秋の声 二晁

並選 石黒・花山

並選

薄暗い金堂の闇に秋の声がありそうな気がします。
(石黒)

鑑真の加護降りそそぐ寺の秋 桃

並選 美也子・洋子

並選

寺の名を言わずとも唐招提寺とわかります。其処此処に鑑真和上の気配が感じられ、上手く俳句にされたなあと思いました。
(美也子)

棚田より列車見送る案内子かな

福田 洸弥

並選 秋霜・石黒

並選

よくある秋の風景だが、リズムもいいし、さわやかな印象。
(秋霜)
あの案山子の立ち方は近鉄電車を意識していますよね。
(石黒)

両輪の菊の明るし御身代り しょうん

特選 石黒
選外 へちま

特選

菊の明るさがお身代りの仏様を癒しているという感覚が良かったです。
(石黒)

選外

御身代わり像の寂しさと明るさを表しています
(へちま)

御影堂庇の闇に秋の棲む 町彦

並選 二晁・一止

並選

手練れた句です。
(二晁)

陵は入る道なし秋の闇 二晁

並選 わこ・太陽

並選

取り合わせいいです。
(太陽)

裳階越し対の塔から萩の風 一止

並選 平華・二晁

並選

薬師寺の塔のからの風、綺麗な句です。
(二晁)

電車追ひ花野を中井精也かな 大美

並選 桃・宮本こぼ

並選

垂仁陵あたり、電車の見るいいスポット彼もここに立っていそうな雰囲気。
(桃)

中井精也はあまり見ないが、景が目にかぶ
(宮本こぼ)

灯火親し千年の堂の句座の黙へちま

並選 桃・一止

並選

灯火親し は夜の光景かとおもうが、この薄暗い古い堂の雰囲気 とも思われて。皆黙り俳句をしています。
(桃)

酒米の目印ですのこの案山子 孝

並選 ひろし・宮本こぼ

並選

口語調俳句ですね

(宮本こぼ)

秋の蝶まろき柱を彷徨へり 一止

並選 美也子・わこ

並選

本堂の柱あたりに蝶がいたのでしょうか。
まろき柱と蝶の取合せで優しい句になって
良いと思いました。

(美也子)

秋湿和上祈りの結跏趺座 へちま

特選 秋霜

特選

秋湿りと下五のけっかふざの取り合わせ
が、なんとも言えない。

(秋霜)

熱々の腸が命の秋刀魚かな 大美

並選 一止・しょうん

並選

僕はわたしは苦手だが、好物の人はたまら
ないらしい。そうした作者の心の叫びが聞
こえてくる。

(しょうん)

何をみる鑑真和蔵秋の果て 洋子

特選 ひろし

特選

鑑真像には何かを見ているかのような雰
囲気があり、自分も似たような句を作りまし
たが、こちらの方が何か真理を掴んでいる
ような気がしたので特選にしました。日本
に来てどのような思いで過ごしていたのか、
不思議と何か感じられるような気がします。

(ひろし)

秋の雨砂利の一粒一粒に わこ

並選 ひろし・太陽

並選

広大な敷地の一粒ずつ洗うかのような雨。
きれいな句ですね。

(太陽)

一輪の桔梗きりりと薬草園 桃

並選 富野香衣・孝

並選

桔梗の濃い紫を「きりり」とオノマトペを
使って表現しています。

また、「一輪」に桔梗の存在感が表れていま
す。

(富野香衣)

何にも無いなあと 思っていました

桔梗がキリリとは さすがです (孝)

大寺のとゆにあふるる秋の雨 花山

並選 秋霜・一止

並選

さりげなく、唐招提寺の今日の雨を詠んで
いるのがいい。

(秋霜)

1点句

一駅をプカプカ歩く秋の日に 石黒

並選 宮本こぼ

並選

秋の日の吟行の様子が目にうかぶ…

(宮本こぼ)

万博の狂騒果てて秋の風 大美

並選 美也子

並選

万博は明日13日で終わります。そして
次の日には正にこの句のような景色になる
でしょう。
(美也子)

御影堂の東山魁夷障壁画

濤声や画伯のブルー秋白し 一止

並選 宮本こぼ

並選

秋白しが、良い
(宮本こぼ)

幌被る刈田に一機コンバイン 洋子

並選 福田洗弥

彼を待つ唐招提寺秋時雨 平華

並選 花山

並選

いつの世の中恋は楽しいですねえ。

(花山)

古の湿る碑撫でる秋の風 ひろし

並選 洋子

客船の水脈の彼方にうろこ雲 大美

並選 福田洗弥

秋祭り太鼓響きし御陵かな 美也子

並選 孝

並選

太鼓の音も御陵を渡って来て 秋祭
り!!! を感じさせてもらいました (孝)

秋雨や苔しつとりと廟癒す 桃

並選 石黒

並選

鑑真御廟の前の苔庭は綺麗でした。雨
が降って一層風情が増したと思います。

(石黒)

秋の花色香それぞれ西の京 石黒

並選 美也子

並選

色々な秋の花があり、どれを季語にするか
迷いましたが、成るほど秋の花とすれば良い
のかと改めて教えてもらいました。西の京
と場所も入っていて良いですね。(美也子)

六脚の脚を網戸に放屁虫 福田洗弥

並選 へちま

並選

あんな小さな屁こき虫を鋭く観察した事
に脱帽 (へちま)

雨やみてむらさき式部輝きぬ 秋霜

並選 福田洗弥

天平の鴟尾は寂れて秋時雨 石黒

並選 桃

並選

秋のさびしさ、雨のすさび、しびにも現れ
て。(桃)

秋湿苔の起伏の明と暗 へちま

並選 桃

並選

苔の起伏は、光があたるか当たらないかの
微妙な明暗 に目をとめた。

鋭い写生句

(桃)

南大門すつからかんと抜けて秋

富野香衣

並選 平華

秋時雨瓦土塀に誘われ 和草

並選 福田洗弥

秋陰や愛らし伏し目盧舎那仏 洋子

並選 和草

秋雨の刃先は句碑を挟りけり 町彦

並選 一止

陵の色なき風の撫でてゆく 美也子

並選 孝

並選

御陵の水は濁りきってましたが 風は心地よく 渡っていました (孝)

こぼれ萩頭を下げて会う人ぞ 孝

並選 わこ

0 点句

薬師寺も唐招提寺も秋雨かな 二晁

時越えて名月渡るフライト便

宮本こぼ

大寺の潜る山門秋の雨 花山

目に見えぬ仏を説くため萩の寺わこ

西の京御陵のあたり秋盛り 石黒

障子開行く秋集める東堂 孝

紅萩のこぼるる薬師寺駐車場 秋霜

幼帝を抱きしめて哭く壇之浦 花山

宙返り静かな喧嘩赤とんぼ ひろし

鑑真像閉じた目の先秋の雨 ひろし

曼珠沙華慌ただしくに咲き散れり 二晁

縁側をひたひた歩き虫の声 福田洗弥

子らの声駅に秋祭りの幟 洋子

壇之浦東男も珍しく 花山

雨となり唐招提寺秋いづこ 秋霜

白き塔ウルトラセブン秋の野に 平華

村祭り太鼓の音は風まかせ 宮本こぼ

秋湿り古墳から見るビスターカー 洋子

鑑真の眺む境内秋の雨 太陽

曼珠沙華ちよつとそこまで逝きし人 宮本こぼ

毒の蝶あさぎまだらの秋胸の 花山

朝露の光る小径を歩む朝 二晁

紋黄蝶名も無き祠寄り添いし 太陽

薬師寺の双塔濡らし秋しぐれ 秋霜

参道の萩はしどろに招提寺 桃

錦秋の胡僧数えし袖瓦 平華

子らの声また引き返す豊の秋 和草

虫の音^{ほか}他は残らぬ空き地かな ひろし

今まさに葉を滑り落つ露の玉 大美

中央の案山子の目鼻際立ちて

しょうん

根の絡む塚(つか)は重そうちろ鳴

く しょうん

露しぐれ濃き青褪せし涅槃絵図 平華

虫の音と小鳥の声と御廟かな 美也子

馬道^{めどう}より燕帰るや巢の一つ 和草

色変えぬ松遂に果たせり渡航 わこ

天平の蕨を洗う秋雨かな 孝

相席は看板猫や秋の昼 富野香衣

金堂の雨垂れ高き秋思かな しょうん

秋雨の唐招提寺芭蕉句碑 太陽

色なき風鬼門の廟に集まりぬ 宮本こぼ

白露や始発電車を待ちゐたり

福田洸弥

葛覆うや秋篠川はゆったりと 孝